

風土



雀こ

神蔵器

炎天を分けて太宰と林太郎

地にまこと天に泰山木咲けり

墓前祭読経の中を蟻走る

お隣に黒き日傘のひと停てり

「走れメロス」泰山木は花かかぐ

炎天を消して津軽の「雀こ」

玉川上水

流れゆく水をかくして揚羽翔つ

森林太郎とのみ墓涼しかり

沙羅咲けり「鷗外遺言書」を胸に

太宰忌の半日日焼けして戻る

水のんで今日のはじまる鑑真忌

時の日や水の下行く水迅き



竹間集

同人作品



雲雀の空

宮川みね子

飛鳥仏雲雀の空となりてゆく
万太郎へ五月舟和のいもやうかな
蛇に逢ふ方向音痴二人かな
草筆鳴立庵のしなやかに反る涼しさよ
青梅を一つ落して藤村碑
「静藤村居の草屋」豊に風うつ萩若葉
藤村をまつりし机緑さす

舞鶴(二)

浜 明史

腰折れの玉葱畑や釣日和
霧晴れて大きく広き鱧の海
べた凧の大浦鱧の脚立釣
狂鶯を背に遠投の糸ふける
蓑火がちらほら黒鯛ちぬの半夜釣
鮎はまち釣りの呉越同舟擬似餌飛び
空梅雨の親海公園家族釣り

虎杖は

浜 福恵

栄螺焼く「ひゅん」と幽かに潮のこゑ
林道もてつなぐ七浦ほととぎす
つややかに潮満ちくるや花南瓜
島二つ霧が匿ふ電波の日
六月の海霧深き信長忌
虎杖は木になんなんとかたつむり
今頃は茅花流しに父母の墓

老 鶯

— 岩木 茂 —

峡の田に緑雨の水輪重なりぬ
川蜻蛉二軒の村となりゐたり
鐘楼の鐘の音降る蟻地獄
金蘭や百年開かぬ厨子の中
落椿日照雨に色を取り戻す
花蜜柑風に匂ひを放ちけり
老鶯や眼鏡の奥の眼を閉ぢて
恍惚と日はあり蜜を吸ふ揚羽
母が居て妻居てカーネーション二本
恐ろしき話に灯蛾の飛び込みぬ

のど飴をひとつ含ふみて衣更へ
潮焼けの顔に麦藁帽子かな
船の滯短く梅雨に入りけり
潮流を逸れ鱧舟の漂へり
燈台の浜昼顔が咲き揃ふ
満月や半月となり海月ゆく
夕焼へ艦隊一列となり進む
ビヤガーデン花火が開く湾の奥
海神の島を暗めて鯖火燃ゆ
甚平を吊り定年を待ちぬたり

山河集

同人作品



神蔵
器選

寒がりの庵主でありし五位鳴けり
大磯に季寄せを濡らす虎が雨
校門の黒松八号梅雨に入る
薫風や鉄扉を開くパンの蔵
この道も西行の道日雀鳴く

近藤幸三郎

火の山の空中回廊朴咲けり
薄暑かなトータムポールに顔五つ
隣席の新聞のぞく走り梅雨
夏つばめ郵便局はなんでも屋
薫風や鴨立沢の疾く流れ
代掻きの終りは四隅なだめ打つ
霧や鍛冶屋小路に夕餉の香
白河の関にて桜足止め

柿沼 盟子

工藤ミネ子

日に遠く憲法記念日峡七戸
弟のぶら提げて来る大西瓜
先知らず行列に就く薄暑かな
釣果競ふ父と息子や風薫る
豆乳を煮詰め卵の花腐しかな
卵の花や犬にもありし車椅子
宰相賞でし西行饅頭花うつぎ

奥田 弦鬼

牡丹百花雲水の背の一系列に
有楽齋に詣づ一念ほととぎす
嗣治展の白き女みる薄暑かな
嗣治描く乳白色や若葉雨
見目涼し藤村旧居下地窓

落合絹代

◇特別作品◇(抄)

青山河

禅 京子

山藤のむらさきさやに雨上る
初夏の流れの音と一と日かな
水の面のふかき翠や通し鴨
山法師野麦峠へつづく道
瀬に佇つや夏うぐひすの遠ざかる
山門へ橋かかりをり白牡丹
卯月かな円空仏の手をさはり
六道を巡る二十歩日の牡丹

風土独語／神蔵 器



寒がりの庵主でありし五位鳴けり

近藤幸三郎

大磯における「風土」竹の子句会での作で、当日私が特選に採った句である。その評価は今も変りはないが、句会への出句には「悼草間時彦」の前書があった。今回「風土」への投句には何の前書もない。何故であろうか。思うに草間さんの忌日が平成十五年五月二十六日で、すでに三年も前であること。また勿論季語として働いているのは「五位鳴けり」であるから、句としては問題はないうことであるが、夏に入ってからの「寒がりの」であるところ何となく違和感を覚えたのではないかということである。

草間さんは昭和六十二年に第二十一世の庵主として嶋立庵に入庵している。庵主といつても庵に住むわけではないので歴代の庵主はめつたに顔を見せなかつたそうであるが、その点、草間さんは月一回の句会を主宰する他、連句の会をよく行っていた。嶋立庵開庵三百年記念の「大磯俳句読本」は草間さんの監修である。冒頭の「大磯という町」という中で草間さんは嶋立庵のことを「夏は戸を明け放つと風が通るので涼しいが、蝉の声が高く、大きな声を出さないと、披講も聞こえない。冬は寒い。暖房などないか

ら冷えるばかりである。樹上の松の樹に風が鳴る。

嶋立庵時雨冷えしてあたりけり

時彦

庵主は寒がりだから、ホカロン持参である」とある。草間さんは旧制武蔵高等学校時代、胸部疾患のため休学、そして退学しており、その後、お元氣そうにお見受けしていた頃も、体質的というのかとかく寒がりであられたようである。

しかし、掲出句の「寒がりの」は今までと事情が違っているのである。腎不全、週二回の透析によつていのちをつなぐ病と、迫りくる老いという非常な運命にさいなまれた日々であった。「寒がり」はたしかに体質的にあつたであろうが。私はそれより精神的な苦しみ、さらに言えば死に向かうどうにもならない「寒さ」であつたと思うのだ。そうした中でもつねに平常心を失うまいとして命を全うしたこの「寒がりの庵主」に心を惹かれ胸が痛くなつた。

痩せて身の軽くなりたる更衣

時彦

白地着て折目正しく老いにけり
なお、この句に前書は是非必要である。作者ならよき前書が付けられる筈だ。

風土集



神蔵器選

天上に沢の音して業平忌 東京 柴田 久子

縁借りて俳諧道場涼しかり

在五忌のガレージセールにチャイナ服

笠懸けの松を支へて蜘蛛の糸

広重の山遠ざかる夏霞

薫風に襖を外す合宿所 東京

コンパスの大回転や夏来る

夏来る 一列に置く試合球

Tシャツが踊の衣装夏立ちぬ

母の日の母の代はりに糸通す

雨あがる五智如来よりてんとむし

春の雷万葉講義のこゑ攫ふ

虹立ちて旅立ち前の吉となす

鞆の津に大伴旅人桜鯛

夏来るUVカットの化粧かな

まな板をすべる熱湯夏立てり 高槻 浅田 光代

丹念に眼洗へば五月来る

ルノワールの女下りくる牡丹かな

箸置きをきちんと並べ豆ご飯

風薫る机に帳簿と赤ん坊

耳瘦せて陽の透き通る薄暑かな

突つ掛けで出てみる卵の花月夜かな

蜂蜜に添へし小匙や風薫る

一跨ぎ出来し昔や溝浚へ

くちなはの目は三角に描く子かな

朴の花山は佳境に入りしかな

敦盛の鎧着初や白牡丹

みずずかる信濃に茅花流しかな

花桐や六波羅蜜寺僧一人

賜りし蒼朮焚きたる形見かな

神奈川 奥田 茶々

奥山 絢子